**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第９４回　（２０２３年６月１３日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４７頁～４８頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

👉『ラーマクリシュナの福音』p46下段最後：Ｍさんが「神を悟るとはどういうことか、神のヴィジョンとは何か」とシュリー・ラーマクリシュナに質問しています。

（前回の続き）

ヴィジョンは、イエスの信者にはイエスが、シュリー・ラーマクリシュナの信者にはシュリー・ラーマクリシュナが、シュリー・クリシュナの信者にはシュリー・クリシュナがヴィジョンとなってあらわれます。しかしここで問題が生じます。それは「どの神がより優れているか」という争いです。

解決策が『バガヴァッド・ギーター』に示されています。

*私に身と心をねる程度に応じ、私はその帰依した人に報いていく。プリター妃の息子（アルジュナ）よ！　人々は、あらゆる道を通って私のもとへとやってくる。（バガヴァッド・ギーター　4-11）*

神は信者の好む様々な姿であらわれますが、そのあらわれはすべて「同じ存在が別の形であらわれたもの」です。電灯に青のカヴァーを被せれば青い光に見え、赤いカヴァーを被せれば赤い光に見えるでしょう？　しかし青に見えても赤に見えても存在は電灯という「同じ存在」です。宗教の信者がこのことを深く信じれば、宗教間の争いはなくなります。これは大事なポイントなので付け加えて説明しました。

**📖４７頁上段　終ろから５行目**

**（師）シッダーのシッダー、つまり『最高に完全な者』と呼ばれるもう一つのタイプがある。人が主人に親しく話しかけるようになれば、つまり人が愛と帰依心とを持って神と非常に親密になるなら、それはまったく別のことである。シッダーはたしかに神に達したのだ、しかし『最高に完全なる者』は、神とたいへん親密になったのである。**

**神を悟るには、人はつぎに挙げる態度の中の一つをとらなければならない――シャーンタ、ダーシャ、サッキャ、ヴァーッツァリア、またはマドゥルである。**

**シャーンタ、すなわち静かな態度。古代のリシたちは、神に向かってこの態度をとっていた。彼らは、世間のいかなる楽しみをも欲しなかった。それは、妻の夫に対するひたむきな献身のようなものである。彼女は、自分の夫は美と愛の権化、まぎれもないマダンであると知っているのだ。**

**ダーシャ、主人に対する召使の態度。ハヌマーンはラーマに向かってこの態度をとっていた。彼は、ラーマのために働くときには身に獅子(しし)の力を感じた。妻もやはりこのムードを感じる。彼女は心魂こめて夫に仕える。ヤショーダーがクリシュナに対してそうであったように、母親もやはり、少しばかりこの態度を持っている。**

**サッキャ、友人のあいだの態度。友だちはたがいに『ここに来ておすわり』と言うだろう。シュリダーマやその他の友だちは、ときどき自分たちの食べかけた果実をクリシュナに食べさせ、またよく彼に背に登った。**

**ヴァーッツァリア、自分の子供に対する母の態度。これがクリシュナに対するヤショーダーの態度であった。妻もまた少しばかりこの態度を持つ。彼女は、いわば自分の生き血を夫にささげるのだ。母親は、子供が満足するまで食べたときにはじめて幸福を感じる。ヤショーダーは、クリシュナに食べさせようとバターを持ってさまよい歩いたものだ。**

**マドゥル、女の自分の愛人に対する態度。ラーダーがクリシュナに向かってこの態度をとった。妻もまた自分の夫に対してそれを感じる。この態度は、他の四つ全部を含んでいる」**

（解説）

**５つの態度について、言語的説明**

**①シャーンタ**

「シャーンタ」は、シャンが語幹で、タが接尾辞です。タがティンになるとシャンティです。シャーンタとシャンティの言葉の源はシャンです。

（板書）Sham（読み：シャン）

Sham + kta（つなげて読むと：シャーンタ）

Sham +ktin（つなげて読むと；シャンティ）

「シャンティ」の重要な基礎は「静かである」ということで、それは心身の静けさを意味します。また身体の静けさは心を静かにするための窓口であり（たとえば瞑想の最初に「体を不動にして座ってください」と誘導されるのはそれが理由です）、心の静けさの方がより重要です。実践が進むと、「体は渋谷にいても心はヒマラヤ」（＝大変な仕事や状況であっても心は静か）という状態になります。

「シャーンタ」すなわち静かな態度ですが、これは感情もコントロールされて静かになっている状態（＝感情が豊かであり過ぎない、感情的でない）をイメージしてください。昔の聖者たちはいつもそのように瞑想していました。彼らはいつも静かで、強い感情を外に出すことはあまりありませんでした。一方で、「サッキャ」（友人への愛の態度）や「ヴァーツァリア」（子供への愛の態度）では感情を豊かに表現します。

**②ダーシャ**

「ダーシャ」の言葉の源は「ダーサ」で、意味は召使いです。ダーサの状態がダーシャです。

**③サッキャ**

「サッキャ」は「サカー」から来ています。『バガヴァッド・ギーター』ではシュリー・クリシュナがアルジュナに向かってサカー、サカーと言っていますが（例：11-41：sakh’eti matvā prasabhaṁ yad uktaṁ）、サカーの意味は友だちです。それも大変仲の良い友だちです。

**④ヴァーッツァリア**

「ヴァーッツァリア」は「ヴァッツァ」（板書：Vatsa）から来ています。ヴァッツァは「子供」という意味で、普通男の子を指します（女の子の言い方も別にあります）が、広い意味で子供を指します。

**⑤マドゥル**

「マドゥル」の意味は「甘い」です。それを人間関係でイメージして、とてもとても甘い関係をマドゥルと言っています。たとえば夫と妻の関係や恋人同士です。

**神への愛について**

ここで質問です。神のヴィジョンを得るため、悟りに至るための、最も偉大な条件は何でしょうか？

参加者「今言った５つ。つまり神への愛」

そうです、神への愛が一番大事な条件です。それが無かったら、どんな種類の霊的実践をしても結果は得られません。スワーミー・シヴァーナンダジー、スワーミー・トゥリヤーナンダジー、他の直弟子たち、そして若い僧たちで話をしていたとき、シヴァーナンダジーはこのような話をしました──「ギャーナ・ヨーガの道、バクティ・ヨーガの道、カルマ・ヨーガの道などいろいろな霊的実践があり、皆さんそれを実践しています。しかし神への愛がなかったら、何も結果は得られません」。

そのように神への愛があったら実践はラクですが、しかし神への愛を抱くこと自体が最も難しいことです。神へ愛を抱き、それを育み深めることは難行ではありませんか？──それはこのように考えればすぐにわかります──私たちは家族のためへの愛はあります。それが普通ですしそれは自然発生的な愛です。では神を愛することは自然にできていますか？　どうですか、皆さん？　自然でその愛は出ます？　言ってください。答えは「いいえ」です。

もちろん神への愛について皆知っていますし、分かっています。ですが、神像の前に少しばかり座って祈ることや神について少し考えることと神への愛は同じではないです。神への愛というのはもっととても深いものです。私たちは自分の知り合い全員を、もちろん知ってはいますが愛してはいませんね？　また時々一緒に食事をする人について考えても、その人への愛と自分の家族に対する愛とでは深さが違うでしょう？　家族への愛はそれほど深いものです。ではそれと同じぐらい神への愛も深いですか？　答えはもちろん「いいえ」です。

バララーム・ボシュ（シュリー・ラーマクリシュナの在家弟子）がドッキネッショル寺院にシュリー・ラーマクリシュナを訪れ始めた頃のこと、シュリー・ラーマクリシュナにこんな質問をしました。「私は神のことを考えています、神についての本も読んでいます、神の写真を飾っています、それなのにどうして神のヴィジョンに恵まれないのでしょうか」。シュリー・ラーマクリシュナは答えました。「あなたは自分の子供を愛するのと同じように深く神を愛していますか？」。バララームはしばらく内省してから、「いいえ、それほどには愛していません」と答えました。

シュリー・ラーマクリシュナの答えは「神のヴィジョンに恵まれないのは神を愛していないからだ」というものでした。そのように、「好き」と「愛」とは違うのです。あなたはいろいろな人のことを「好きだ」と思っても、それをすべて愛とは言わないのではありませんか？　愛とはもっと深いものではないでしょうか。今の私たちの状態は「神様が好き」な状態です（「好き」の中にも人によっていろいろなレベルがありますが）。神を好きな人はいっぱいいます。けれども神への愛というのはもっともっと深いものなのです。ですから神を愛することは難しいと言っているのです。

本当に愛したなら次のようなしるしで分かります──「愛する人といつも一緒にいたい」（＝離れると心が痛い）、「愛する人のことをいつも考えていたい」（＝愛する人のことを考えて喜びたい、思い出すと嬉しい）、「愛する人の話をしたい」（＝愛する人の話をすると嬉しい）、「愛する人に食べてもらいたい」、「飲んでもらいたい」など。では私たちは24時間のうちどれ位の時間、神について考えていますか？　たぶん、神の写真の前に座るときと神の写真を見たとき、神に祈るときだけで、すぐまた忘れてしまうのではありませんか？　神のことをいつも思い出していますか？　神について話してとても喜んでいますか？　仕事の時にはどうですか？　全く忘れてはいませんか？　仕事の時に「私は神の道具です」という考えはありますか？　答えは「いいえ」です。

本当に神への愛があれば、いつも神のことを思い出し、いつも皆の中に神をみて世話をしたいと思い、神について話して喜び、神の名を聞いて嬉しくなり、神を瞑想し神についての書物を読み嬉しいのです──それが神を愛している基準でありしるしです。そしてそれが基準だったら、私たちはいつも神のことを忘れるばっかりです。なぜなのでしょう？　それは神が実際の人間のように動いたり話をしたりなさらないからです。私たちはそのような経験を持つことができないので、神についてのイメージが抽象的なのです。抽象的なものを愛するのは難しいことです。

ですが神を愛することが出来ないわけではありません。形のないブラフマンを愛することは非常に難しいですが、具体的な形を持った神の化身を愛するのはどうですか？　できるのではありませんか？　たとえばシュリー・ラーマクリシュナ、イエス、ブッダは歴史上で生きていた人間です。彼らの生涯の出来事の本もあります。そのような方たちを愛するのは無理ではないでしょう？　神を愛することと神の化身を愛することは同じことなのです。なぜなら神の化身の中には神以外のものは何もないですから。

神は私たちの中に住んでいます。私たちの「ハート」（感じる心）の中に住んでいます。つまり一番近くにいます。それだけでなく、神と私たちの関係は永遠です。それに比べて人と人との愛には始まりがあり、盛衰があり、時には無くなります。且つ不安や心配が付きもので、決して満足することのできないものです（その種類の愛によって自分の人生が満たされるわけではありません）。反対に、神への愛は私たちが実践を積めば徐々に増えていって決して無くなりません。それに神を愛することで、私たちは幸せ、楽しみ、至福を得ることができます。人間への愛と神への愛がどれくらい違うか分かるでしょうか。

人と人との愛は人形遊びみたいです。子供のころ人形で遊んでいたところを、大人になると物質的な人形で遊ぶのをやめて、生きている人形（Living toys）で遊ぶのです。この例の真意は、神への愛と比べたら、世俗の愛は愛というよりも遊びのようなものだということです。どうですか？　ちょっと耳が痛いですか？　けれどもそれは本当に正しいです。

なぜなら愛と遊びは違いませんか？　「生きている人形」と遊んで苦しみ悲しみ失望束縛が生じると「その遊びをやめたい」という気持ちになりませんか？　ですがその程度のものを愛と呼べるでしょうか一方で、本当の愛の中には自由があり幸せがあります。これは大きな違いです。私が言いたいことは、私たちは「愛している」という言葉を使っていますけれどもそれはまるで遊びみたいだということです。なぜなら本当はそれは愛ではないからです。愛ではないから幸せも得られなければ自由も得られないのです。

ですがもし、世俗的な愛を神聖化できたら、つまり自分と愛している相手とのあいだに「神聖化された関係」を築くことができたら（＝人間関係を神聖化することができたら：If we can spiritualize our relationship）、それは本当の愛となります。

しかし神聖化できない限り、それは遊びと同じで「遊びが終わったらうちに戻って遊びのことは忘れ、また次の日遊びます」というように、時間と空間に限定され、肉体がなくなると同時に終わるのです。事実、再生のときには、前世で愛した人のことはすべて忘れているではありませんか？　一方、神への愛は時間と空間に限定されていません。肉体がなくなっても精妙なからだのレベルで続き、再生の際にも続きます。それはすなわち、神への愛のサムスカーラを持って再生するということであり、そのような人は子供のときから神を愛していて、それが「神への愛が続く」「神への愛は無くならない」という事の証明です。普通の愛と神への愛がどれくらい違うか、分ったでしょうか？　それほど神への愛はレベルが高いのです。ですから神への愛は難しい──それほど高いレベルの愛が生じること自体が難しいからです。

ですから、さまざまな実践が必要となります。

では神への愛はどのような実践で培われるのでしょうか。「清らかさ」「Truthfulness真実」「純粋な愛」「慈悲」の実践であり、それが同時に神を愛する条件にもなります。なぜならそれが神であるからです。つまり神への愛を養いたいのなら自分自身がそうならなければならない、ということです。私たちは自分自身を清らかにしないとならない、親切を実践しないとならない、純粋な愛と慈悲を実践しないといけないのです。

今の私たちは執着や欲望でいっぱいで、時間と空間で限定されているものを愛しています。神は時間と空間に限定されていませんが、そのように全く矛盾している二者を同時に愛することは不可能です。実践当初は同時に愛せる気がしても、最終的には自分自身を純粋にしないと、本当に真実を実践しないと、本当に欲望と執着をやめないと、神への愛を深めることはできません。これも神への愛が難しいという1つの原因です。

**5つの態度──具体的な説明**

シュリー・ラーマクリシュナはそれらの実践に加えて、「人間関係における５種類の愛を、神との愛に重ね合わせて実践してください」と助言しました。「人間同士の愛の関係を神との愛の関係に重ね合わせて神への愛を自分に養ってください」と言ったのです。オプションは５つあります。

シャーンタは静かな愛──愛していますが感情的にはならない愛です。シャーンタの態度を実践するとき、神のイメージは「私のお父さん」です。キリスト教ではそれを実践していますね。

ところで西洋で起こったフェミニズムの一部の人は、神のイメージがなぜいつも男性なのか、神についてなぜお母さんのイメージを持てないのか、という疑問をもちました。それでキリスト教徒の中にはマリア様が好きな信者やマリア様が好きな宗派、またマリア様の教会もあります──私が南米ブラジルに行ったとき、サンパウロの教会はMother Mary’s churchでした。その信者たちは、神は「私のお母さん」だと思って信仰していました。この態度も正しいです。「母なる神」（Divine Mother）というアイディアは、ヒンドゥ教では昔からあります。日本ではたぶん、そのコンセプトはあまりなかったと思います。また西洋も少ないです。しかしインドでは母なる神という考えは普通であり、ドゥルガー、カーリー、ジャガダットリー、アンナプルナ、バヴァーニなどさまざまな形があります。タントラの実践で強調されるのは常に「母なる神への礼拝」です。ベンガルではカマラーカーンタ、そして、マザー・カーリーを愛したシュリー・ラーマクリシュナが有名です。母なる神への愛はシャーンタに入りますが、父への愛よりも感情豊かなものになります。

ダーシャは特別な召使いで、自分のことなど考えないで、主人をできるだけ一生懸命にお世話したいという召使いです。どれだけ報酬をもらえるか、その仕事をすると自分がどれだけ大変か、などを考えずに一生懸命お世話する人はいるでしょう？　その方々の例をイメージしてください。

その偉大な例はハヌマーンです。ハヌマーンは自分のことを全く考えず、主人ラーマの願いをすべて絶対に叶えようとしました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも同様です。師シュリー・ラーマクリシュナの願いをすべて叶えようとしました。ラーマーヤナ叙事詩の中に、ラーヴァナがシーターを盗んだシーンがあります。ラーヴァナはセイロン（現スリランカ）に住んでいて、ラーマはシーターがそこにいるのか、いるなら無事なのかをまず知りたいと思いました。しかしインドとセイロンは海で隔たっており、舟がなかったのでジャンプして行かねばなりませんでした。ラーマはサルたち（動物のサルではありません。肉体の様子がサルと似ていた、人間の１部族です。彼らは独特の文化を持っていました）の誰かに行ってきて欲しいと頼みました。部族の中で行くことができる者は何人かいましたが、帰ってくる力まであるのはハヌマーンだけでした。そして皆が「ハヌマーンならきっとできる」と考えました。ハヌマーンは飛ぶ前に、自分の力ではなくラーマの力でできるのだと思いつつ、「ガッジャンタン　ラーマ　ラーミ　ブヴァンタグ　ラーマ　ラーミ……」［👉映像データの1：23：40］と大きな声で何回も唱えました。すると体がとても大きくなって、力も湧いて、ハヌマーンはセイロンまでジャンプして渡ることができたのです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダもベルル・マトのオールド・テンプルの前を歩きながら、「ガッジャンタン　ラーマ　ラーメーティ　ブヴァンタン　ラーマ　ラーメーティ……」と、唱えるペースが遅くなったり速くなったりしながら一時間、二時間、大きな声で唱えたことがありました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダにとってのラーマはシュリー・ラーマクリシュナです。ハヌマーンがそうであったように、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは「私はシュリー・ラーマクリシュナの召使いです」と思いながら唱えました。この種類の召使いは主人の願いを何でも叶えることができます。

サッキャの愛は、家族よりも好きというほど大好きな友だちに対する愛です。その人とずっと一緒にいたい、その人といるあいだは家族のことなど思い出しもしない──そんな関係もあるでしょう？

『バーガヴァタ・プラーナ』の中にシュリー・クリシュナがヴリンダーヴァンにいたときの話が載っています。クリシュナには同い年ぐらいの友だちがいました。友だちはクリシュナにあげる果物が甘いかどうか、まず自分でかじって確認してからクリシュナにあげました。けれども普通、神にお供えをするときには粗相がないよう気をつけて供えますね。傷んでないかをよく見て買って、きれいに洗ってガンジス川の神聖な水で浄めてから尊敬を持ってお供えします。自分の食べ残りを神に差し上げるということはしませんし、もしそうするなら罪を犯すことと同じだ、と考えるひともいるかもしれません。しかしサッキャの友だちは「クリシュナに一番おいしいものを食べさせたい」という一心でそうするのです。サッキャの友だちは尊敬というより、そのように振る舞えるほどに自分とクリシュナとは親しい関係だと考えていました。そのような愛は、結構レベルが高い愛だと思いませんか？　しかしながらシャーンタの態度を実践する人は絶対にそのようなことはしません。シャーンタの態度とサッキャの態度の違いが分かったでしょうか。公の場でサッキャの態度をとることはなかなか難しいですが、個人的に行うなら可能です。

ヴァーッツァリア、子供に対する愛については想像しやすいですね。結婚後、子どもができると奥さんの旦那さんへの愛の割合が少し減って子供に行くのはよくあることです。赤ちゃんを育てることは大変なことですし、人間は他の動物と違って子育てに何年もかかるので、その間子育てに集中しなければなりません。子供への愛が深くなければできないことです。

マドゥルの特徴は、他の4つの態度のすべてがマドゥルの中に入っている、ということです。その意味で5つの中でマドゥルが最高と言われています。またマドゥルのもう1つの特徴は、最終的に主体と客体が一つになるということです。２つの存在が１つになる、二者が別々の存在ではなくなる──それがマドゥラ・バーヴァ（マドゥルの態度）の結果です。

たとえばラーダーとクリシュナです。またミーラバイもそうです。彼女はインドのある国の王と結婚しましたが、自分の真の伴侶はクリシュナだと考え、宮殿を出、ヴリンダーヴァンへ行き、クリシュナに集中して生き、クリシュナの賛歌を作り、クリシュナを瞑想して生きました。またシュリー・ラーマクリシュナの女性弟子ガウリ・マーの夫はダモダラ、とてもクリシュナでした。また自分の弟子のドゥルガー・プリ（ドゥルガー・デーヴィー）には神のことだけを思って尼僧のように生きて欲しい、そしてアーシュラムの面倒を見て欲しいと考えていました。ドゥルガー・デーヴィー自身も世俗的な結婚ではなく神との結婚を望んでいました。そこでプリの有名なジャガンナート寺院に行って、ドゥルガー・プリは神と結婚式を挙げました──それは普通の結婚式で行うように、自分の首飾りを神の首にかけ、神の首飾りを他の人からもらって自分の首に自分でかける、というものでした。その時から本当にジャガンナート（クリシュナ）は、ドゥルガー・デーヴィーの夫となりました。これらのようなケースはインドで時々あります。

マドゥラ・バーヴァの実践は夫や妻や恋人がいないとできない、ということではありません。しかし夫や妻や恋人ではない別の恋人を見つけてその人にマドゥラ・バーヴァを実践すると、非道徳的な関係が始まってそれはマドゥルの実践の意図から外れてしまいます。マドゥラ・バーヴァの意味は「神は私の旦那さん、奥さん、恋人である」と想像し、いつもそのように考えて神を思い出し、神をお世話する、ということなのです。マドゥルの実践を誤解しないよう気を付けてください。

そしてシュリー・ラーマクリシュナの助言は、「5つの態度の中で自分が好きな態度を取りあげて実践してください」ということです。たとえばサッキャが好きではない信者もいるでしょう。神を自分の息子として世話をしたい信者もいるでしょう。その場合は、イシュタ・デーヴァ（自分の理想神）を例えばチャイルド・クリシュナ（クルクシェートラのクリシュナではなく、ヤショーダーにとってのクリシュナ、ヴリンダーヴァンの子供時代のクリシュナです）に決めて愛します。そのようにして自分に神への愛を養うのです。その実践により神への愛は深くなります。

1984年12月の14日の『ラーマクリシュナの福音』では、カーヤ（身体）、マナ（心）、ヴァーッキャ（言葉）のレベルで実践してくださいという助言があります。助言の前の歌の部分から読んでください。

（読む）📖７１３頁上段　１行目

**お前の母シャーマに、ほんとうに泣いて泣きつけ、心よ！**

**そうすれば、どうして、彼女が**

**そっぽを向いていらっしゃれよう。**

**もし信者がほんとうのの心で神に祈るなら、神はその人の前に御自身を現さずにはいらっしゃれない。**

**私はこのあいだ、お前たちにバクティの意味を教えただろう。それは身体と心と言葉とで神をあがめることだ。『身体であがめる』というのは、手で神に仕え、おまつりをし、足で聖地に行き、耳で神の御名と栄光をとなえているのをきき、目で神の御像を見る、ということだ。『心で』とは、絶えず神を瞑想し、そのリーラーを思い起こし、考えることだ。『言葉で』とは、神に向かって賛歌をうたい、御名と栄光をとなえることだ。**

今日の話は神への愛をどのように養い深めるかでした。１つの方法は人間の関係の愛を神への愛に重ね合わせる実践で、もう１つがカーヤ、マナ、ヴァーッキャ（板書：Kāya Mana Vākya）という人格の3つのレベルでの実践です。次回はそれを説明します。

**（Q＆A）**

**Q）**日本では太陽が天皇の先祖とされていて、伊勢神宮のアマテラス（天照）という女神様が信じられています。

**A）**そうですね。ですがその女神のコンセプトと母なる神のコンセプトはちょっと違います。母なる神はもっと包括的な意味ですね。この宇宙を創造・維持・破壊する母なる神、というイメージです。アマテラスはそこまでたぶん、皆さんは考えてないと思います。

**Q）**そうですね。天照はどちらかというとキング、支配者ですね。治める者、という感じです。

**Ａ）**そうですね。母なる神は全知全能遍在でもあります。ですが天照はそこまでではないですね。そのことを考えるとインドで母なる神というのは包括的なアイディアです。

**Ｑ）**ありがとうございました。

**A）**あなたのコメントはいいと思います。ありがとうございます。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：４７：５５頃）

トゥミ　ブランモー　ラーモ　クリシュナ　トゥミ　クリシュナ　トゥミ　ラーム

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上